KOSAIDO BLUE BOOKS

# 邪馬台国の神符

KOSAIDO BLUE BOOKS

著　者　志茂田景樹

発行者　川口勝治

発行所　廣済堂出版

〒105
東京都港区芝2-23-13
電話　03-453-1201 (代)
振替　東京8 164137番

印刷所　廣済堂印刷

©1980　志茂田景樹

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

# 邪馬台国の神符

志茂田景樹

KOSAIDO BLUE BOOKS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目次


| | |
|---|---|
| プロローグ | 7 |
| 第1章　謎の薬草 | 13 |
| 第2章　邪馬台国徳島説 | 33 |
| 第3章　人　質　犯 | 61 |
| 第4章　倭王の刺青 | 96 |
| 第5章　安楽死協会 | 122 |
| 第6章　復讐の怨念 | 144 |
| 第7章　戦慄の自動車メーカー | 168 |
| 第8章　賀茂の長者 | 196 |
| 第9章　邪馬台国の御統（ミスマル） | 220 |
| エピローグ | 242 |

# プロローグ

——人出が多かったら、かなりの視線を集めたにちがいない。

二十六、七歳、と思える若い女であった。もっと上のようにも見えた。

日本人離れした顔の造りをしていた。細面なのに、双眸も大きく鼻も大きかった。双眸には、一点、艶やかに輝くものがこもっている。

鼻は、多少、高慢な印象をあたえるかもしれない。が、育ちのよさを思わすものがあって、わるい感じはなかった。

プロポーションも、両肢がのびのびとして均整がとれており、ファッション・モデルのような雰囲気を持っていた。

若い女は、小砂利を敷きつめた小径をゆったりと歩いていた。

場所は、香川県高松市にある栗林公園。

天下の名園として名高い、この公園は、総面積七五ヘクタール、六つの池と十三の丘が考えぬかれて配置されており、随所に植えられた松にも名木が多かった。

遠州流の粋を集めて造った廻遊式庭園である。

寛永十九年（一六四二）、それまでの高松藩主だった生駒家に代わって入封してきた松平頼重が造園工事をはじめてから、五代、百年がかりで完成し、明治維新までは、松平家の下屋敷でもあった。

南北に長い庭園で、南庭と北庭に分かれている。若い女は、南庭への廻遊路を歩いていた。

まわりに、ほかに人影はない。

閉園まぢかの時間だった。ウイークデーでもあり、雨も降っている。

栗林公園は、雨の日のほうが松が霞み、池が煙って、見事な景観になる。が、いまは冬のさなかで、雨と言っても氷雨だった。

入園客の数は南、北両庭をあわせて数えるほどのようだった。その客たちも、そろそろ出口へ向かっているころであろう。

若い女は、白い傘を差していた。

その傘が傾いた。足を止めて、目の前にある松を見あげたのだ。

苔の生えた石でまわりを囲まれて、盆栽の松をそのまま巨大にしたような枝ぶりを誇っている。立て札には〝百石松〟とあった。

幹が枝分かれしている部分は、鋭い曲線を描いて迫力に充ちていた。

もともと家老の稲田家の庭にあったものを移植したものだそうである。この松をこよなく愛した稲田家六代の貞一は、手入れに没頭しすぎて登城におくれ、そのため、五百石の家禄を百石けずられたので、以来、この松を百石松と称するようになったという。

若い女は、十数メートルはある横枝で、その先端の細枝が地を這っているあたりに目を移して、ため息をついた。

枝ぶりに感嘆したわけではなかった。

その表情には、心労を象徴するかのような翳りが見られた。

気をとりなおしたようだった。若い女は歩きだした。ゆったりして見える足どりは、ほんとうは気が重いこの表われなのかもしれない。

小ぶりの松が垣のように並べて生えている小径があった。枝々が絡みあって、まるで黒い大蛇が数匹、かたまっているような錯覚を抱かせる。

その小径を通って、北湖の畔に出た。

島がふたつ浮かぶ池だ。ともに平たい皿を伏せたような形をしている。芝を植え、青味がかった、渓流によく見られる小岩を配し、姿のよい松のながめが美しい。

池の面は氷雨にたたかれて、わびしげに揺れている。

若い女は、いっとき立ちどまってぼんやりと島のひとつに視線を這わせたが、すぐに歩きだして、橋を渡った。赤く塗られた欄干と、多少、茶がかった黒い擬宝珠のとりあわせが、しっとりとした艶を放っている橋だ。雨によく似あっている。池で大きな鯉がはねて、思いのほか強い水音を立てた。

若い女は、橋を渡りきると、右手に梅林を望みながら歩いた。開花期には、のどかな梅見がたのしめそうな道だった。

ひっそりとした茶亭があった。若い女は、そこの庭へ入った。茶代を払えば、茶を点ててくれるところだ

った。

古い井戸があった。昔はそこから汲んだ水で茶を点てたものらしい。

若い女は、井戸の手前にあるつくばいに一瞥をくれて、少しためらったような表情を見せた。つくばいに行って、手を洗おうかどうしようかと迷ったのであろう。

左手の水屋から、中年の女が出てきた。

「——どうぞ」

と、右手の茶室へ手をあげた。

庭に向かって躙口があって、つくばいへ露地石が続いている。ちゃんとした茶のもてなしを受けるのなら、躙口をくぐって入ることになる。

が、入園者へのサービスでやっている、略式とも言えない茶の接待であって、そこまでする必要もなさそうだった。

若い女は、縁側にあがってハンドバックを置き、コートを脱ぐと、その茶室へ入っていった。床の間の前で正座して辞儀をすると、掛け軸の書をながめた。ちゃんとした拝見の作法だった。かなり、茶をやっている人間の仕種であろう。

若い女は、立ちあがると、すり足で畳の縁を踏まずに、炉を迂回して向かいの壁際に行った。三つ置いてあった質素な座布団のひとつに坐ると、膝に両の手をあわせて置いた。

待つほどもなく、さっきの中年女が点てた抹茶と茶果をいっしょに運んで現れた。亭主側のほうも、作法ぬきだった。

砂糖をまぶした、たぶん、この地の銘菓らしい、その茶菓を女は口に含んだ。なにか考えふけっている表情だった。

茶碗の抹茶はちいさな泡が中央でこんもりと盛りあがり、茶筅振りのたしかさを窺わせた。ほのかに湯気が立ちのぼっている。

若い女は、手を伸ばして茶碗をとった。左の掌に置くと、右手でまわして口につけた。ひと口すすって、目を少し細め、点てぐわいを味わうふうだった。

その双眸は濡れていた。衝動的になにかの感情に衝き動かされて、涙をにじませたのかもしれない。

若い女は、残った茶を三口ほどですすり終えた。茶碗をもとの位置に置くと、ちょっと忙しげに立ちあがり、部屋を出た。縁側で、水屋に声をかけた。出てき



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

た中年女に茶代を払うと、腕時計をちらっと見て、かすかに肩をひそませた。

文字盤にダイヤモンドの小粒をまぶした、豪華な腕時計だった。

若い女は、急ぎ足で茶亭を出た。もとの十字路に出ると、南湖への廻遊路に入った。しばらく行くと、いくつかの棟を寄せて回廊ふうにつないだ平屋の建物があった。

ネズミ色にくすんだ屋根と赤っぽく艶やかな柱と和紙の戸障子がおちついた、たたずまいを見せている。縁側のひとつはすぐに南湖に面していて、わびた縁石の片側を湖水が洗っている。

その向こうに、石組に囲まれて五葉の松が低く枝を広げていた。根が長年月に亙って湖水に洗われたためか浮きあがり、たくさんの足を持った怪獣のような奇観を呈している。

女は、梅林を前景にした、その建物の庭へ入った。大きな露地石が玄関へ続いていた。その途中で足を止めた。

掬月亭（きくげつ）、と呼ばれる建物だった。生駒家が藩主の時代だったときにすでに建っていたと推定され、代々、茶所として使われていたらしい。

掬月亭、の名の起こりは、中国唐代の詩人、于良史の、

〈水を掬すれば月手あり〉

のことばからとったことによるという。

若い女は、建物のなかを見るつもりはないようだった。南湖の対岸をぼんやりと見つめていた。双眸は暗く沈んでいた。

対岸は、カエデの木が多かった。水辺から苔が生えあがっており、葉を落とした枝々は黒ずんでさみしげだった。

紅葉のころは、青い苔を背景にあでやかに、妖しげに燃えたって、目を奪われるにちがいない。

氷雨はあがる気配である。

白い傘が揺れた。若い女が振りかえったからだった。その視線は、いま通ってきた径のほうへ気忙しく走っておちつかなかった。人を待つ風情だった。

だれかとここで落ちあうことになっていたのかもしれない。

若い女は、また、ため息をついた。視線は、正面にそびえる山に行った。

標高二百メートルあるかなきかの小山だった。椀を伏せて、少し稜線を鋭くしたような秀麗な姿で、まるでこの庭園のために造ったように見える。

紫雲山、という山だった。

常緑樹がかなりあるのか、それほど冬枯れの趣きはない。氷雨はやんでいた。

若い女は、紫雲山の頂上を振りあおいだ。白い傘が大きくうしろへそよいだ。

その瞬間だった。若い女の白い額に、ぽつん、といった感じで孔が穿たれた。白い傘が離れ、若い女は体の骨が急に失くなってしまったかのようにぐにゃっと崩れ、倒れた。

孔からは、血が噴き出ていた。血は鼻梁に沿って流れた。

若い女は、ほとんど叫びをあげなかった。ただ、操られたように手が額に行って、指で血をすくう仕種をした。

その手が柄を空に向けて転がっている白い傘の生地に伸び、指が弱々しく動いた。

なにか字を書いたようだった。

倭の刺青……

と、読めた。〝青〟の字は、ほとんどかすれて、やっと判読できるていどだった。

指の動きが止まった。

その前に、呼吸は止まっていたようだった。

即死に近い状態なのに、手だけが、そのダイイング・メッセージを遺すために、ほんのつかのま、生き残ったように思えた。

いまわのきわにそれを遺そうという執念が、絶命しても、手を指をまだ動かしたのかもしれない。

死顔には、それほど苦悶の痕跡が感じられなかった。むしろ、安らかだった。

小径を、ともに閉じたばかりの黒い傘を手にした、ふたり連れが通った。ふたりとも、サラリーマンふうだった。南庭コースを時間に追われてまわっている途中らしく、掬月亭に立ち寄るつもりはなさそうで、ただ、見て歩いていた。

ひとりが露地石に倒れている若い女に気づいて、息を呑んだ。もうひとりも気づいて、棒立ちになった。

「――顔から血を流しているぞ！」

先に気づいたほうが、叫びながら、庭へ入ってきた。

「殺人か？」

もうひとりが悲鳴のように言って、まわりを見た。人影は見えなかった。

「もう死んでるようだぞ！　公園の職員に知らせなければ」

先に庭へ入ったほうは、死体を見おろして、声を震わせた。

そのふたりが第一発見者だった。……

# 第一章　謎の薬草

## 1

――一月二十七日の昼近く。

加倉良介は、愛車のマセラティ・カムジンを自宅のあるマンションの駐車場にすべりこませた。

小豆色の流麗なボディーだ。角っぽさを持たせた曲線は、磨きぬかれた宝石のカットをほうふつとさせた。

スーパーメタリック・タイヤが、かすかなきしみ音を発して停止した。

コックピットで、加倉はあくびをひとつした。疲労の浮いた顔だが、満足しきったあとの、悔いのないものだった。

（いつまでこんなことをしていていいもんかな）

加倉は思って苦笑した。

昔、ちょっとだけ暴走族にも籍を置いたことがあった。スピード、と言うより、マシンといつも肌を接していることを好んだのだった。

その暴走グループが他のグループと喧嘩をすることが多くなり、走ることよりも、そのほうが目的になってきたので、いやけが差して抜けた。そのころ、G医科大という私立の有名医大の学生だった。

それから、十年も経っているのに、車に耽溺（たんでき）するくせは抜けそうもなかった。加倉の場合は、耽溺、ということばがぴったりだった。

乗らなくても、ボディーを磨いているだけでもよかった。天気のよい日に道に出して、自分はちょっと離れているところから煙草をふかしながら、日射しに輝くボディーをうっとりとながめるだけでも満足した。

ゆうべは、十日ぶりぐらいに走った。ゆうべと言っても、駐車場を出たのは午前三時近かったから、きょうのことだった。

東名を突っ走り、朝まだき浜名湖の、凪いだ湖面をぼやっとながめてもどり、途中、何度か立ち寄って気に入っている喫茶レストランでのんびりとコーヒーを飲んだ。

それだけのことだった。
それだけのことで、加倉は満足した。
が、いつまでも車でもあるまい、という気もしている。もう二十九歳なのだ。
身を固める時期にきている。小うるさい、世話好きな伯母だの叔母だのが、よく見合写真を持ってきて、おしつけていく。
そういうおばさん連中には、車ばかりいじっている甥がいつまでも人形と添い寝している幼児に見えるらしい。
加倉は、早くに母に死なれ、父にも数年前に逝かれて、ひとり住まいだった。のんびりと日を送っている感じで、親類の目にはグータラに映るようだ。
その心配は無用だった。
加倉には、すでに結婚を誓った恋人がいる。
刀茂有佐子、と言って、ファッションモデルをしていた。二十四歳、そんなに売れっ子ではないが、半分、趣味でやっているせいで欲がなかった。
加倉は、また、仕事のほうも忙しい。G医科大ではインターンまでしたが、じつは医者にはならなかった。医者にはちがいなかったが、毛色の変った医者になった。
加倉は、コックピットから出た。鍵を振りまわしながら、階段をあがった。
あがったところが、マンションの玄関ロビーに続く廊下になっている。青梅街道沿いにある、なかなか瀟洒なマンションだった。
玄関ロビーに出て、エレベーターのボタンをおした。エレベーター・ケージの階段表示灯を見ると、七階から降りてくるところだった。
ほどなく一階に着いて、家族連れが一組、降りてきた。三歳ぐらいの男の子を連れた若い夫婦だった。
(そうか、きょうは日曜日だったな)
入れ代わりにケージに入りながら、加倉はきょうは仕事を休もうかと思った。
そうもいかなかった。加倉のところは日曜日も営業しており、ふだんの日より忙しいのだ。
場外馬券所に行って、馬券だけでも買ってくればよかったな、と加倉はちょっぴり悔やんだ。競馬は趣味のひとつだった。
八階で降りた。右に行って、三番めのドアの前で止まって鍵を差しこんだ。

ドアに、

〈加倉漢方院〉

と、書き入れたプラスチックの看板が掲げてあった。

加倉は、舌うちした。

鍵穴に鍵がおさまらないと思ったら、マセラティ・カムジンの鍵だった。加倉にはおおらかなところがあり、ときとして、それがそそっかしさになって表われることがあった。

あらためてドアの鍵をとり出し、なかへ入った。三LDKの住まいだった。

玄関からリビングルームに入るまでの短い廊下に、漢方生薬の匂いがこめている。

リビングルームは、患者の待合室兼診療室になっている。壁に人体解剖図が掛けてあったり、サイドボードの上に古壺やムササビの剝製が置いてあったり、かと思うと、スーパー・カーのカラー写真や、クラシック・カーのホイールが飾ってあったりして、たたずまいは雑然、模糊としている。

加倉は、ソファーのひとつにどっかりとかけると、テーブルのシガレットケースから一本とって口にくわえた。ロングサイズのシガレットだった。

加倉が長いシガレットを多少、斜にくわえると、なかなかの絵になる。とくに、横顔がよかった。

彫が深く、全体の印象は甘いマスクなのに、ぴかっと精悍なものが閃くことがある。

「あなたの本性は、きっと野生のヒョウなのよ」

刀茂有佐子が、そう言ったことがある。乱れた世に力を発揮するタイプだ、という、ありがたいような、ないようなご託宣もした。

ときどき、加倉は、怒りや憎悪をそのままストレートに吐き出せる修羅の世界に飛びこみたいような衝動に居ても立ってもいられなくなることがあった。

有佐子は、そうした加倉の胸奥をよぎる荒ぶる感情を見ているのかもしれない。

ただの衝動で、すぐに消えた。いまの加倉の生活は平穏すぎて、怒りや憎しみを掻きたてられることがないのだった。

それでいいのかもしれない。ものたりない気もしている。

加倉漢方院は、江戸時代から続いている、漢方の世界ではかなり名の通った漢方医院だった。昔は、加倉漢方堂、と言った。



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com